

# 仁坂吉伸・新知事から

## 「けじめ」の声聞かれず

上はもとより処分に値する行為といえます。これに対する「けじめ」も何らなされていません。

これでは、事件の全容にメスを切り込んで厳しく断罪したと見なすにはあまりにも遠いと県民が感じ、不満の声が上がるのもうなずけるというものです。

し、責任をとらせて、「けじめ」をつけることが、木村被告人の辞職に伴った選挙で当選した仁坂知事に、県民が期待する役割といえます。

仁坂知事は、年明け早々、鳴り物入りで「公共調達検討委員会」を立ち上げ、数ヶ月後は、提言をまとめるとして、談合防止のシステムづくりを急いでいきます。談合防止策づくりの声が大きいもの。一方、徹底した真相究明と責任追及の声は、年明け以後には聞かれず、影を潜めた感がある。

ります。早期の暫定的な談合防止策の策定が必要なのに異論はありませんが、鳴り物入りであるだけに、談合防止策の策定で、臭い物に蓋をしようとする意図が透けて見えるというものです。

過去に真摯な反省のないシステムづくりでは、不正を温存したままであって、真に是正が図れたとはいえないし、県が失った県民の真の信頼の回復には到らないといふべきです。真相究明を大阪特捜の起訴で終結にするのではなく、県独自に、

失った信頼に「けじめ」をつけるために、事件や疑惑の真相を究明する筋道を早期につけ、その反省の上にたって、真の談合防止策を構築すべきです。  
(事務局長・畑中正好)

真摯な反省のない是正策では

不正を温存すること！



